

春分儀式

I O S 儀式魔術文書 VE00A

- | | |
|-------|---------------|
| 第 1 章 | 解 説 |
| 1 | 司官の配置 |
| 2 | アストラル神殿の構造 |
| 3 | 身辺の準備 |
| 第 2 章 | 儀 式 |
| | 神殿への入場 |
| | ウシャブティ |
| | マルクト神殿（四大の別院） |
| | 長老の召喚 |
| | 四門の固定 |
| | 天界の城の建立 |
| | PWの交換 |
| | 宇宙の主への賛歌 |
| | 天界の城の分解 |
| | 門の解放 |
| | 長老の帰還 |
| | 地上への帰還 |

THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE VERNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I O S ASTRAL TEMPLE WORKING

第 1 章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春秋分点の前後48時間以内に実施すること。本儀式では、マルクト神殿の四大の別院を核として実践する。

儀式内容は、12世紀の西欧の古文書『Vita Merlini』より、宇宙の創世神話を借定している。この『マーリンの生涯』に記述された創世神話の骨格は、錬金術師ゾシモスの説話、スワラルディーの光の神智学や、ヘルメス学の神話に通底するものがある。

- 四大の無からの創出
- 創造主による四大の調和
- 天界は星々で飾られ創造物を取り巻いていた。
- 星辰界の下に、昼と夜を仲介する空が生まれる。
- 海は大地を四つの円で囲み、そこに潮流が生まれた。
- 四方位の風と四つの領域

また、四大の支配権を確立するためラビ・ヨセフ・ギカティラの『光の門』の第5門(第6の光球)にある聖四文字の流旗を用いている。流旗から派生する風の翼(天使)の召喚と喚起については、ドナルド・タイソンの『テトラグラマトン』を参照のこと。

1 司官の配置

a 司官の指定

本儀式に必要な司官の人数は、次の5人である。

それぞれの太守(ドミヌス)と貴婦人(ドミナ)は、聖四文字の長老を神の姿形として纏う。長老とは、ユダヤ教のエノク、キリスト教のイエス・キリスト、イスラム教の隠れイマームにほぼ該当するアツィルト界のティファレトの神格である。従って、個々の名前はない。ある意味で、司官たちの纏う5神格は、ひとつの神格の個々の位相である。

また、長老の命により出現する風の翼(天使)たちは、聖四文字の流旗に配属された24柱の霊である。

DOMINUS COLUMUNA (DC) 柱の太守 = 霊 = 調停する諸力
DOMINUS AURORA (DA) 夜明けの太守 = アレフ = 四つの柔軟 (Mutable)
DOMINUS VASTITAS (DV) 砂漠の太守 = シン = 四つの活動 (Cardinal)
DOMINA PONTUS (DP) 深淵の貴婦人 = メム = 四つの不動 (Fixed)
DOMINA BOREALIS (DB) 極北の貴婦人 = 地 = 均衡する諸力

b 長老の召喚

四人の司官は、マルクト神殿の別院で聖四文字の長老を召喚し、長老が「肉の衣を去る」までは、実効上の神(天使を使役する者)として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

太守の纏う「長老のテレズマ的イメージ」

白い雪のような髪を両肩まで垂らし、長い白髪が胸を撫でている。その双眼は燃え上がる炎のようであり、その顔は太陽のように眩しく輝く。かれの全身は熱した青銅のような黄金の光に包まれている。かれは黄金の宝冠を戴冠し、白く輝く白長衣は素足の上までを覆っている。その胸の部分で、金布のサッシュが白長衣を止めている。

天使たちと違い光翼はない。その全身を包む黄金の光輝は、脇に控える天使たちの光の翼を霞ませるほど眩しい。

かれが口を開くと巨大な滝の瀑布めいた音が響きわたる。かれは右手に七つの惑星を携え、命令を発するとき、その口から煌めく諸刃の刃が現れる。諸刃とは、どの方角にも切れる刃である。つまり、保護するためにも、罰するためにも。

その動きは重々しく、天文学的な時間を経た叡智を感じさせるが、老齢による弱さの兆しはない。むしろ、山が動くような魂の奥底に響く迫力を感じる。

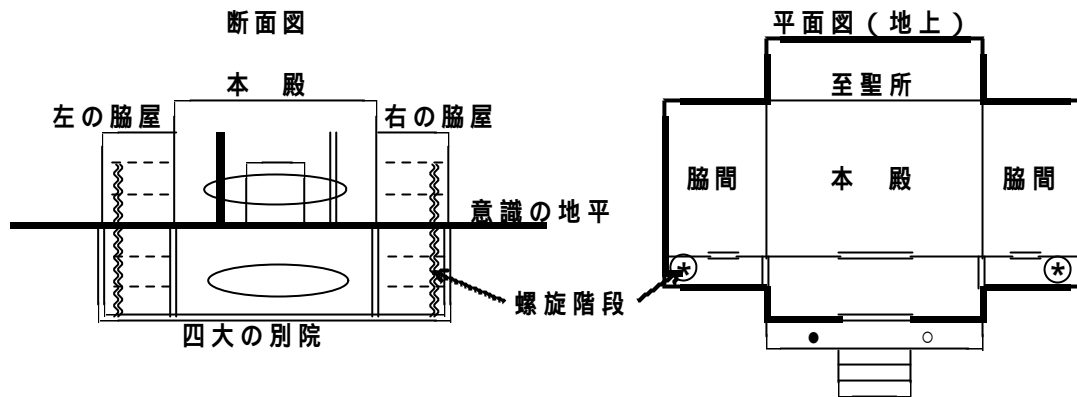
あるときは、白馬に乗り、背後に無数の天軍を従えている。天軍は、同じく白馬に乗り、白い木綿の法衣を纏い、槍に似た武器を光り輝かせている。

貴婦人の纏う「長老のテレズマ的イメージ」

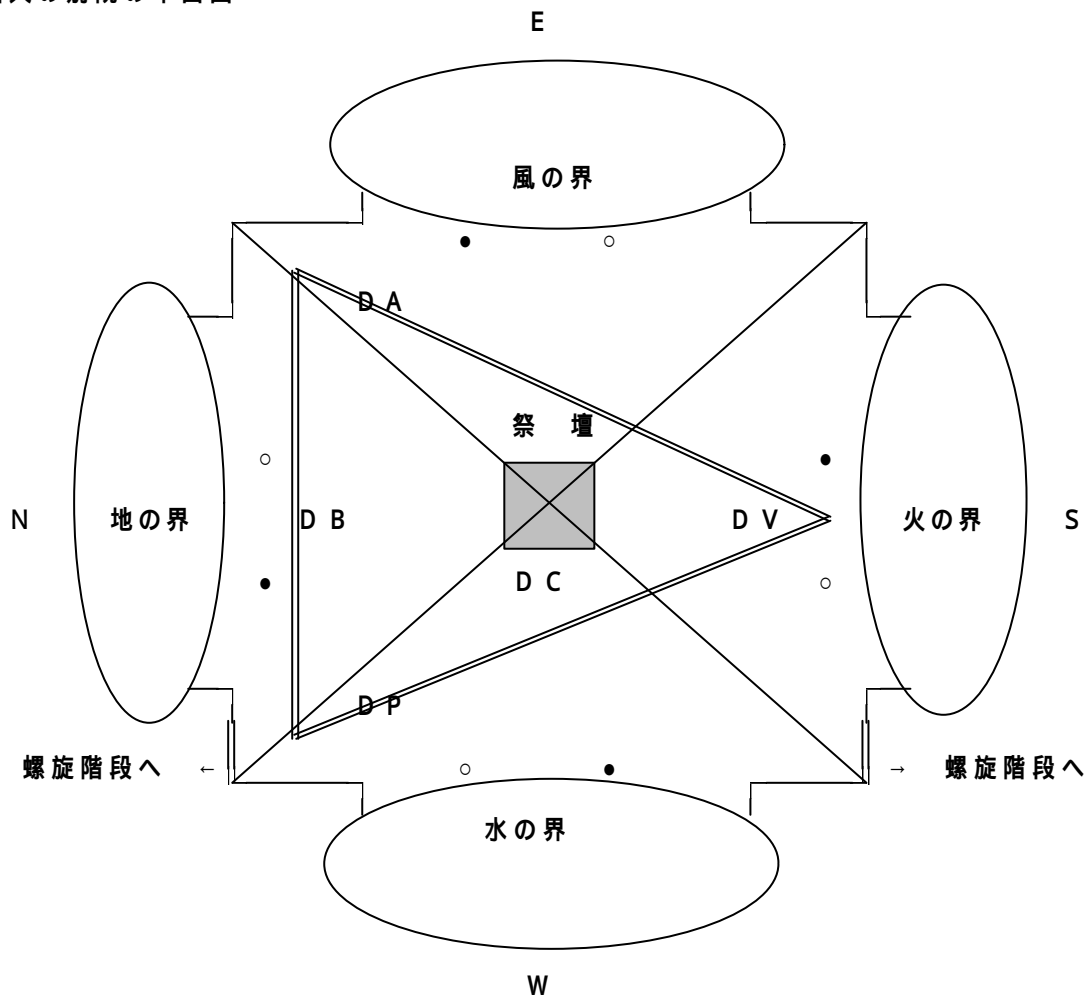
上記に同じ。ただし、髪はなく。双眼はルビーのように輝いている。

2 アストラル神殿の構造

本儀式においては、マルクト神殿の別院を使用する。それは、ソロモン神殿を忠実に模した団のアストラル神殿の史実には残されていない下部構造である。ソロモン神殿の本殿の両翼には、3階建ての脇屋があり螺旋階段で連結されていた。今回は、この脇屋から神殿の地下に入り、本殿の真下にある四大の別院を使用する。



四大の別院の平面図



主祭壇 : 黒の大型二重立法祭壇。
ヤキンとボアズ : 石榴の頭飾りを乗せた標準的な白柱と黒柱は、
各方位の壁の中央に門を形成している。

3 魔術の教理及び技法的側面

a 聖四文字の流旗とそれに対応する封印及び風の翼

ラビ・ギカティラが『光の門』において記述した＜四つの流旗＞には、聖四文字の支配する天上の四大を冒頭の文字とする各三つの封印が付属する。従って、 $4 \times 3 = 12$ の封印が存在し、それぞれに獣帯の各サインが帰属する。

例えば、第1の流旗にはヨド（天上の火）を冒頭とする三つの封印、I H V H、I H H V 及び I V H H が属する。もちろん封印の基本形は、最初の I H V H であり、イタリア文字 H は第2のヘーを示す。

これに続くのは、各封印の支配を受ける風の翼たちである。順配置の封印に帰属するのが＜右の翼＞こと、男性形の天使であり、逆配置の封印（最初と第2のヘーの位置を転換した封印）に帰属するのが＜左の翼＞こと、女性形の天使である。

召喚時の神名の発音では、各封印の最初の H を「ヘイ」と発音し、第2の H を「ヒー」と発音する。

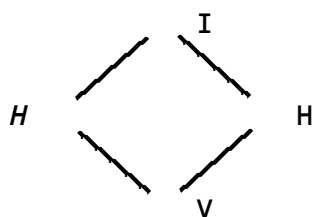
流旗 封印基本形	獣帯 帰属	元 素	頭 部 印	右の翼 (男性形)	隠の封印	左の翼 (女性形)
第1の流旗						
I H V H	白羊宮	火 - 活動	I H V H	Q T h H A L	I H V H	H T h Q I H
I H H V	人馬宮	火 - 柔軟	I H H V	Q T z H A L	I H H V	H T z Q I H
I V H H	獅子宮	火 - 不動	I V H H	Q L I A L	I V H H	I L Q I H
第2の流旗						
H V H I	巨蟹宮	水 - 活動	H V H I	D V I A L	H V H I	I V D I H
H V I H	双魚宮	水 - 柔軟	H V I H	D M V A L	H V I H	V M D I H
H H I V	天蠍宮	水 - 不動	H H I V	D A B A L	H H I V	B A D I H
第3の流旗						
V H I H	天秤宮	風 - 活動	V H I H	V A H A L	V H I H	H A V I H
V H H I	双児宮	風 - 柔軟	V H H I	V I H A L	V H H I	H I V I H
V I H H	宝瓶宮	風 - 不動	V I H H	V I V A L	V I H H	V I V I H
第4の流旗						
H I H V	磨羯宮	地 - 活動	H I H V	S h B V A L	H I H V	V B S h I H
H I V H	処女宮	地 - 柔軟	H I V H	S h H V A L	H I V H	V H S h I H
H H V I	金牛宮	地 - 不動	H H V I	S h I A A L	H H V I	A I S h I H

本儀式では、活動（Cardinal）の獣帯サインのみが使用される。つまり、白羊宮、巨蟹宮、天秤宮、磨羯宮である。座標軸を天界の四大としたため、今回は D V が春分点を、D A が秋分点を代表することになる。

アグリッパは、『オカルト哲学』第1巻第8章において、獣帯の進行順序は、序 - 活動（Cardinal）、破 - 不動（Fixed）、急 - 柔軟（Mutable）と説いている。従って、今回と対をなす秋分儀式では、柔軟（Mutable）のサインが特別な役割を示すであろう。

各聖四文字の封印において、テトラクテュスを平面化したシギルが用いられる。ただし、注意すべきはある封印において右の翼の召喚は、左の翼の追儼となる。その逆も同じ。つまり、この対の天使たちは同時には存在できないのである。一方が生成ならば、他方は破壊の機能をもつ。しかし、順配置が善で逆配置が悪という意味ではない。

各シギルは、下の4点を結ぶ図形である。活動（Cardinal）の場合は、1辺が欠けた菱形（45度回転させた正方形（コの字））になる。



I H V H 白羊宮（右）
I H V H 白羊宮（左）
H V H I 巨蟹宮（右）
H V H I 巨蟹宮（左）
V H I H 天秤宮（右）
V H I H 天秤宮（左）
H I H V 磨羯宮（右）
H I H V 磨羯宮（左）

の順 Q T h H A L
の順 H T h Q I H
の順 D V I A L
の順 I V D I H
の順 V A H A L
の順 H A V I H
の順 S h B V A L
の順 V B S h I H

b 封印の発音

24柱の風の翼を支配する12対の名前は、＜バアル・シェム＞つまり、＜名前の主＞たる魔術師の口から発音され、その息と生命力で活性化されなければ単なる文字にすぎない。神聖名を発音することは、神の創造の技を模倣することに等しい。形式的になされれば術者に破滅的な結果をもたらすであろう。

神聖名の発音は、術者の生体磁気を著しく消耗させる。発音に際し＜バアル・シェム＞は、人体の血液に蓄積された神聖な生命力を引き出す。そのため血液の充填された心臓がその核として用いられる。この神聖力は、創造主が始祖アダムに下しおかれ、血脈によって現代まで継承された霊的エネルギーである。

この儀式で聖四文字の封印を発音する際には、＜黄金の夜明け団＞が神聖名発音に使用した振動様式に準じて行われる。

最初に、術者は、頭頂部にあるケテルの神聖なる白輝光の觀念に意識を上昇させる。そして、その心を至高の熱望の次元まで高揚させる。神聖なる名前を発音すると、術者の精神状態に呼応するさまざまな諸力を引き寄せることになるので、高次の次元への回路をあらかじめ開いておくのである。

次に、十分に息を吸い込み、ケテルから白輝光を心臓まで下降させる。そして、意識を心臓すなわちティファレト中枢に集中させる。

第三に、息をとどめながら、発音しようとする聖四文字を心臓内に白く輝く文字で公式化する。心臓のなかに文字をひとつづつ、ゆらめく白い炎のように形成し、視覚化する。この文字を強く実感する。その文字は、光輝く鮮明なものとし、くすんだ白色に視覚化してはいけない。

第四に、息を吐きつつ、音響が自分のなかで強く振動するように、ゆっくりと文字を発音する。同時に、自分の肉体が宇宙全体に充滿し、内部に木霊する振動が宇宙の隅々まで満たしていくのを感じなさい。そして、吐き出した息が宇宙を満たし、振動させた名前が時空連続体の彼方まで反響していく様子を想像する。

この様式で発音する場合は、姿勢を良く脊椎を伸ばし、喉と口を大きく開き、正確に大きく発音できるようにする。その振動が胸全体を震わせる様子を感じなさい。

これは光体を用いた場合でも同じである。

4 身辺の準備

a 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。（家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等）、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

b シナリオ

シナリオ文書を一部、手軽に確認できる場所に置く。シナリオの流れを暗記できなかったら、自分以外のパートの台詞とト書をテープに吹き込んでおく。

c 直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的沐浴）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

第2章 儀式

参加者は、座ったまま目を閉じ、自分のアストラル的姿形を形成する。前方に光体を形成する。自らが輝く光の法衣を纏う様子を強く視覚化する。

光の法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

DC、DA、DV、DP、DBの順番で神殿に入る。

順番が来たら、自分の光体の身体を立ち上がらせ、肉体を脱ぎ捨てたまま、前に進み光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとポアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたIOSの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、入場の順番に司官たちが並ぶ。

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るDCが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」DCは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話的形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

DCは、廊室の右の扉をくぐり、右の脇屋に入る。
少し遅れてDAとDVは、反対側の扉から左の脇屋に入る。

DPとDBは、DCの後を追うように、右の脇屋に入る。
参列者は、自分の直観で、どちらから下りるか選択する。

それぞれ、左右の脇屋に入った司官たちは、螺旋階段を下りていく。

右の脇屋にある螺旋階段は、南を向いた狭い長方形の扉から左に折れて、身体の左側を壁に押しつけるようにして下りる構造になっている。その螺旋階段は、滑らかな石の壁に彫り込まれた手すりのない石階段である。ちょうどパリのノートルダム寺院の階段のように、バランスを崩すとそのまま、右足から真下に落下してしまうような不安感がある。たった三階分地下に下るだけだが、螺旋階段の底は無限の彼方に続いているように深く、底は測り知れない臙な淵のように見える。

左の脇屋から地下に入った者は、それとは逆に北向きの入口から右に折れ、身体の右側を壁に押しつけるように下っていく。左足が地底に吸い込まれるように、恐ろしいのは同じである。

さて、地下1階の脇間に続く長方形の開口部が見える。右(左)の脇屋を下る者は、左(右)肩越しに香木で敷かれた床と儀式用具を納めた棚を瞥見するとさらに次の階層に下りていく。

次に垣間見た地下2階に続く開口部のなかは、ぎらぎらと刃の輝きも禍々しい武器庫である。長槍、剣、斧、短矛、弓矢、バイク、盾、鎧、鉄球鎖、破碎鎚など多彩な武器、防具の類が整然と並べられている。

そして、いよいよ地下3階の開口部が見える。螺旋階段は、さらに下層に延びており、目眩のしそうな螺旋階段の作り出す渦の中心は、暗黒のなかに霞んで消えている。

ためらわずに、地下3階の脇間に踏みいる。

それぞれの脇間は、小さな礼拝堂のように作られており、東の奥には「炎の剣」を図案化したタピスリーがかけられている。左右におかれた低い長椅子は、ちょうど休憩か、礼拝に適した形になっているが、今回はそこに寄る余裕はない。

脇間の神殿内部へ通じる扉に向かうと、マルクトの女王の色階の四色で染め抜かれた格子縞の帳がかけられていた。DCが帳を割って別院のなかに入る。

DCは、ただ、ひとり、4面が開放されて、直接、四大の世界と直結している地下神殿の混沌とした空気のなかを進んだ。

南西の入口から真っ直ぐに祭壇の西に立つ。

DCは、呼吸と中央の柱で魔法鏡を活性化し、別院の境界までオーラを拡張し、四大の霊気が混沌と渦巻く別院の内部の空気にオーラを溶け込ませる。開放された四つの門から絶え間なく吹き寄せる四大の息吹が、DCの魔法鏡に直接ぶつかり、清涼な「風」、灼熱の「火」、流れる「水」、盤石の「地」の意志が拮抗する。

続いて、DCは、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。
引き続き、小六芒星の追儼儀式を行う。

東に面し、開門の宣言を行う。

「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ」

さらに、物見の塔の儀式を応用し、霊気を安定させる。

祭壇の南側に行き、火の界に背を向け、祭壇からランプを取り上げる。正面(北)、右(東)、左(西)と三方向にランプを振り言う。

「総ての幻影が去りし後に、宇宙の隠されし深みを飛翔する聖なる形なき炎を見るであろう。

汝、火の声を聞け」

次に振り返り、祭壇を背中にし、南に面する。白と黒の柱の彼方に荒涼とした砂漠が広がる。直立した奇岩なのか、風化した巨石建造物なのか分からない、小山のような石の柱の間に、蜃気楼のようなオレンジ色のサラマンダーが闊歩している。

押し寄せる熱波に対面し、自分の目の前に霊の能動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「B I T O M」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A H I H」

別院の床の四半円が、他の部分から切り取ったように活性化される。

DCは、螺旋光のサインを応用し、五芒星を南のヤキンとボアズの間を抜け、四大の別院の南壁に接する火の界の境界面そのもののまで押し出し、火の界の上に刻印する。

L V Xサインを行う。

次に火の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「O I P T E A A P E D O C E」

その中央に獅子宮のサインを書き、神名を振動させる。

「A L H I M」

D Cは、別院の火の頂点から追儼の五芒星を螺旋光のサインにより、火の界の境界面そのもののまで押し出し、刻印する。五芒星が祭壇から南壁に飛ぶ間に、別院の4分の1の領域が完全に静まり、火の元素は、境界に固定された。

D Cは、フィロソファスのサインを行う。

「大いなる南の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。

汝、南の物見の塔の天使よ」

別院の四半分は霊的に安定した。

祭壇の西側へ行き、水の界を背に盃を取り上げる。三方向に盃の水を注ぎ言う。

「最初に、火の技を治めし祭司は、荒れ狂う海に清めの水を撒かねばならぬ」

次に振り返り、祭壇を背中にし、西に面する。白と黒の柱の彼方に、次々と波頭の押し寄せる大海原が広がっている。白い波頭は、蹄の代わりに水掻きの生えた水棲の馬である。その鱗の生えた蒼い肌の上に、海の乙女たちが豊かな胸乳をさらして、手綱を御している。

自分の目の前に霊の受動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「H C O M A」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A G L A」

別院の床の四半円が、他の部分から切り取ったように活性化される。

D Cは、螺旋光のサインを応用し、五芒星を西のヤキンとボアズの間を抜け、四大の別院の西壁に接する水の界の境界面そのもののまで押し出し、水の界の上に刻印する。

L V Xサインを行う。

次に水の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「E M P E H A R S E L G A I O L」

その中央に鷲のサインを書き、神名を振動させる。

「A L」

D Cは、別院の水の頂点から追儼の五芒星を螺旋光のサインにより、水の界の境界面そのもののまで押し出し、刻印する。五芒星が祭壇から西壁に飛ぶ間に、別院の4分の1の領域が完全に静まり、水の元素は、境界に固定された。

D Cは、ブラクティカスのサインを行う。

「大いなる西の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。

汝、西の物見の塔の天使よ」

別院の半分が霊的に安定した。

祭壇の東側に行き、風の界に背を向け、香炉を取り上げる。三方向に香炉を振り言う。

「かくのごとき炎、進む《風》のなかにあらん。また、《声の似姿》を放つ形なき《火》、さらに声高に叫ぶ《渦巻く炎の光》のなかにもあり」

次に振り返り、祭壇を背中にし、東に面する。白と黒の柱の彼方に、丈の高いヒースの草原の緩やかな起伏が見える。その背後には黄塵と、流れ行く逞しい雲の連なりが広がり、黄色っぽい空の雲間には、半透明な存在の乱舞する様子が伺える。

自分の目の前に霊の能動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「E X A R P」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A H I H」

別院の床の四半円が、他の部分から切り取ったように活性化される。

D Cは、螺旋光のサインを応用し、五芒星を東のヤキンとボアズの間を抜け、四大の別院の東壁に接する風の界の境界面そのもののまで押し出し、風の界の上に刻印する。

L V Xサインを行う。

次に風の召喚の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「O R O I B A H A O Z P I」

その中央に宝瓶宮のサインを書き、神名を振動させる。

「I H V H」

D Cは、別院の風の頂点から追儼の五芒星を螺旋光のサインにより、風の界の境界面そのもののまで押し出し、刻印する。五芒星が祭壇から東壁に飛ぶ間に、別院の4分の1の領域が完全に静まり、風の元素は、境界に固定された。

D Cは、セオリカスのサインを行う。

「大いなる東の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。

汝、東の物見の塔の天使よ」

別院の四分の三が霊的に安定した。

祭壇の北に行き、地の界に背を向け皿から塩をつまみ上げ、三方向に撒いて言う。

「暗き輝きの地界に屈み込むなかれ。そこには、背信の深みと、闇を纏う冥府王が不可解なるイメージに悦び、風猛き絶壁、黒く逆巻く深淵は、つねに光放たぬ形なき虚しき場に連れ去るものなり」

次に振り返り、祭壇を背中にし、北に面する。白と黒の柱の彼方に、峨々たる小暗い山脈が聳えている。緑の裾野には、無数の生命が満ちあふれているようだが、むしろ、黒い岩肌を晒した山肌に、煌めく金属的な光芒が散らついている。剥き出しの鉱脈の上をグノームの工具が叩いているのだろう。

自分の目の前に霊の受動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「N A N T A」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A G L A」

別院の床の四半円が、他の部分から切り取ったように活性化される。

D Cは、螺旋光のサインを応用し、五芒星を北のヤキンとボアズの間を抜け、四大の別院の北壁に接する地の界の境界面そのもののまで押し出し、地の界の上に刻印する。

L V Xサインを行う。

次に地の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「E M O R D I A L H E C T E G A」

その中央に金牛宮のサインを描き、神名を振動させる。

「A D N I」

D Cは、別院の地の頂点から追儼の五芒星を螺旋光のサインにより、地の界の境界面そのもののまで押し出し、刻印する。五芒星が祭壇から北壁に飛ぶ間に、別院の4分の1の領域が完全に静まり、地の元素は、境界に固定された。

D Cは、ジェレイターのサインを行う。

「大いなる北の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。

汝、北の物見の塔の天使よ」

別院全体が霊的に安定した。

祭壇の西に行き東面する。深紅の薔薇で霊の能動と受動の召喚の五芒星を描く。

「E X A R P A H I H
H C O M A A G L A
N A N T A A G L A
B I T O M A H I H」

続けて言う。

「神秘なる統一のタブレットの名前と文字において、われ汝を召喚す。

汝、生命の霊の神聖なる諸力よ」

花を置き、ヴェールを開くポータルサインを行う。

「われ汝を召喚す。汝、不可視の座に住まう天球の天使たちよ。

汝は宇宙の門の守護者にして、またこの神秘なる球の守護者なり。

邪悪なるもの、均衡を失いしものを遠ざけよ。

永遠の神々の神秘の住居を汚さざるため、われに力と霊気を与えよ。

われがその中に入り、神聖なる光の秘密を分かたため、わが球を清浄かつ神聖たらしめよ」

D Cは、魔法鏡の内部の安定し、活性化した霊気を徐々に変容させていく。

天使たちの降臨により、激発する直前まで高められた魔術師の意志が、神殿の外壁、すなわち拡張されたD Cの魔法鏡の表面に、四色の糸を出現させ、その四大の性質を有した縦糸と横糸が、霊の指に紡がれて彩なす錦の帳を織り込んでいく。それと同時に白色を基調とした魔法鏡の内部の霊気が、徐々に赤化し、黄土色のぼやけた色調から、黄金の光を放つ魔術師の霊気に統合された。別院は、黄金の光に満たされた。

これらが完全に成し遂げたられたら、神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

D Cの霊的な鈴の合図で、D Aを先頭に別院の南西の入口から、そして、同時にD Pを先頭に別院の北西の入口から、司官と参列者が入場を開始する。

司官は入口から直接、自分の場に向かった。参列者は、それぞれ選んだ四隅点に向かう。

D C は、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

D C : 「 I O S の兄弟姉妹たちよ。春分の儀式を開始せん。
司官たちよ、長老の姿形を纏わん。」

D B は、中央の祭壇に向かい両手を広げて言う。

D B : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、極北の娘の祈りを聞き賜え。汝が力を貸し賜え。
われは汝が光のなかで再生せんとす。
われは汝が光のなかで完成せんとす。
われに白き衣を、黄金の宝冠を預け、
慈悲の王座に着かせ、審判の白馬を引き具させよ。
わが右手（めて）に支配の王笏を、わが左手（ゆんで）に裁きの剣を、
汝が御手の秘密の力の名前により、われに油塗り賜え。」

D C は、中央の祭壇を挟んで南から北を仰いで言う。

D C : 「汝は、われらの父にして、われらの母なり。
われらの栄光にして、われらの輝ける自己が顕現する。
そは本然の性、始原の光体なり。」

北の門の前にいる D B から始まり、それぞれの背後の地平線から覆い被さるように出現する
巨大な長老の像が、影のように門を覆う。

D B は、両手を下ろす。

D V は、中央の祭壇に向かい両手を広げて言う。

D V : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、砂漠の息子の祈りを聞き賜え。
主の王座を取り巻く古きものたち、
そは、活動なる四大の支配者、
I H V H（ヨド・ヘー・ヴァウ・ヘー）
H V H I（ヘー・ヴァウ・ヘー・ヨド）
V H I H（ヴァウ・ヘー・ヨド・ヘー）
H I H V（ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ）」

D C は、中央の祭壇を挟んで北から南を仰いで言う。

D C : 「汝は、彗星より火を借り、光の戦を率いる者なり。
われらが足下に大地が見え、また天も見えるなり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

南の門の前にいる D V から白い輝きが放たれ、各司官の背後にある長老の像が白い衣に包まれ、右手に王笏を左手に法の剣をもつ鮮明な姿を現す。

D V は、両手を下ろす。

D A は、中央の祭壇に向かい両手を広げて言う。

D A : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、夜明けの息子の祈りを聞き賜え。
主の王座を取り巻く古きものたち、
そは、柔軟なる四大の支配者、
I H H V（ヨド・ヘー・ヘー・ヴァウ）
H V I H（ヘー・ヴァウ・ヨド・ヘー）
V H H I（ヴァウ・ヘー・ヘー・ヨド）
H I V H（ヘー・ヨド・ヴァウ・ヘー）」

DCは、中央の祭壇を挟んで南西から北東を仰いで言う。
DC：「汝は、夜明けの薄明にして、黄昏の薄明なり。
われらが影のはずれに來たとき、太陽はわれらの頭上にあり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

神殿の北東にいるDAから黄金の輝きが放たれ、各司官の背後にある長老の像が黄金の光輝に包まれ、鮮明に現われる。
DAは、両手を下ろす。

DPは、中央の祭壇に向かい両手を広げて言う。
DP：「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成（ゲネシス）にして、始原（アルケ）なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、深淵の娘の祈りを聞き賜え。
主の王座を取り巻く古きものたち、
そは、不動なる四大の支配者、
IVHH（ヨド・ヴァウ・ヘー・ヘー）
HHIV（ヘー・ヘー・ヨド・ヴァウ）
VIHH（ヴァウ・ヨド・ヘー・ヘー）
HHVI（ヘー・ヘー・ヴァウ・ヨド）」

DCは、中央の祭壇を挟んで南東から北西を仰いで言う。
DC：「汝は、月の秘薬たる光にして、太陽の秘薬たる光の光なり。
われらが玄妙なる物質の心的王国を越えるとき約束は成就せん。
そは本然の性、始原の光体なり。」

神殿の北西にいるDPからゆらめく炎のような光が放たれ、各司官の背後にある長老の双眼が燃え、口から煌めく諸刃の剣が現れる。
DPは、両手を下ろす。

四司官の詠唱が終わったとき、神殿の中心からDCが発言する。

DC：「汝は、われらが主にして王、至高至聖なる霊なり。
汝、燦然たる神の光を身に帯びたる者よ。
汝は聖霊の天の父にして、宇宙の母なり、しかして、心の天の子なり。
われらは汝を召喚し、汝に満たされんとす。
汝、隠れたる者、ティール！
この血に降下し賜え。
汝、本性の知らざれし者、オターレド！
この肉に降下し賜え。
汝、かくのごとき者、ホア！
この骨に降下し賜え。
IHVS h H（ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー）
われらは戴冠せる王、天と地の支配者とならん。
IHShVH（ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー）
われらは万軍の将、天と地の支配者とならん。」

祭壇の傍らにいるDCの上に覆い被さるよう出現する巨大な長老の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、聖四文字の長老のテレズマ的姿形が融合し、再形成されてDCの霊的外形が急激に変化する。

同時に四司官それぞれに同じ変化が現れる。

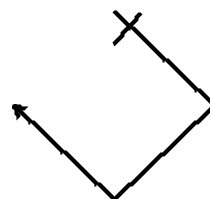
DCが宣言する。

DC：「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。
五界を結ぶは、われなり。
軸と輪を束ねるは、われなり。
われは光と闇の轆轤を回さん。」

DCが発言する。

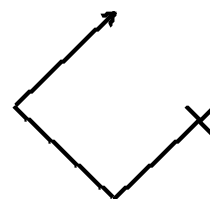
DC：「神聖なる長老たちよ。
四方位に風の翼を喚起し、門を固定せよ。」

D V は、南の火の門の中央に移動し、南方を向く。
 D V：「わが有する神聖なる火の封印により、われ汝を喚起す、黄金の風の翼よ。」
 王笏を振り上げ、I H V Hの封印のシギルを描く。
 「I H V H (ヨド・ヘイ・ヴァウ・ヒー)の名において
 われは汝に命ずる。
 Q T h H A L (ケサエル)よ。
 火の第1の封印の命により、
 白羊宮を支えよ。」
 再度、I H V Hの封印のシギルを描く。



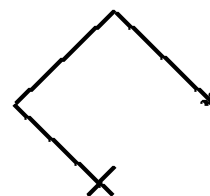
それと同時に火の門の彼方に、風の翼ケサエルが出現する。
 ケサエルは、小柄で細身の胴体に、尖った頬骨をもち、薔薇色の肌をもち、ゆらめく鼻梁、カールした燃えるような赤毛、薄い灰色の瞳、小さく尖った耳をもつ男性形の天使である。その背後には豊かな光翼が、燃える炎のようにゆらめいている。
 D V は、風の翼を王笏で指しながら右周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、門の彼方から火の諸力を誘引しよう命ずる。
 D V：「ケサエルよ、火の獅子を引き具し、祭壇に物見の塔を築くべし。」
 火の門の彼方から真紅の獅子を右手で引き具したケサエルが、一直線に中央の祭壇に歩みより、その獅子を祭壇に接触させる。獅子は祭壇にとけ込み、天界の火の元素を変容させ、祭壇の南側に隣接する小型の真紅の物見の塔を形成する。
 ケサエルは、獅子を放したまま、再び門の彼方に戻り溶けて消える。

D B は、西の水の門の中央に移動し、西方を向く。
 D B：「わが有する神聖なる水の封印により、われ汝を喚起す、黄金の風の翼よ。」
 王笏を振り上げ、H V H Iの封印のシギルを描く。
 「H V H I (ヘイ・ヴァウ・ヒー・ヨド)の名において
 われは汝に命ずる。
 D V I A L (ダヴィエル)よ。
 水の第1の封印の命により、
 巨蟹宮を支えよ。」
 再度、H V H Iの封印のシギルを描く。



それと同時に水の門の彼方に、風の翼ダヴィエルが出現する。
 ダヴィエルは、丸い額に尖った顎、深い青色の小さな瞳、青白い肌に短い暗茶色の髪と少し女性的な風貌をもつ男性形の天使である。その背後には艶やかな光翼が、輝いている。
 D B は、風の翼を王笏で指しながら右周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、門の彼方から水の諸力を誘引しよう命ずる。
 D B：「ダヴィエルよ、水の蠍を呼び来たり、祭壇に物見の塔を築くべし。」
 水の門の彼方から青い蠍を右手に乗せたダヴィエルが、一直線に中央の祭壇に歩みより、その蠍を祭壇に接触させる。蠍は祭壇にとけ込み、天界の水の元素を変容させ、祭壇の西側に隣接する小型の青い物見の塔を形成する。
 ダヴィエルは、水の蠍を放したまま、再び門の彼方に戻り溶けて消える。

D A は、東の風の門の中央に移動し、東方を向く。
 D A：「わが有する神聖なる風の封印により、われ汝を喚起す、黄金の風の翼よ。」
 王笏を振り上げ、V H I Hの封印のシギルを描く。
 「V H I H (ヴァウ・ヒー・ヨド・ヘイ)の名において
 われは汝に命ずる。
 V A H A L (ヴァハエル)よ。
 風の第1の封印の命により、
 天秤宮を支えよ。」
 再度、V H I Hの封印のシギルを描く。



それと同時に風の門の彼方に、風の翼ヴァハエルが出現する。
 ヴァハエルは、細身でか細げにさえ見えるが優雅な物腰の男性形の天使である。波打つ栗色の髪とプロポーションの取れた風貌、大きな金緑色の瞳、高く通った鼻梁、深紅の唇、丸い顎、軽く日に焼けた肌、魅力的な微笑みを浮かべた唇から白い歯が覗いている。その背後には薄い光翼が、ゆたかにたなびいている。
 D A は、風の翼を王笏で指しながら右周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、門の彼

方から風の諸力を誘引するよう命ずる。

D A：「ヴァハエルよ、風の鷹を呼び来たり、祭壇に物見の塔を築くべし。」

風の門の彼方から黄色い鷹を右手に乗せたヴァハエルが、一直線に中央の祭壇に歩みより、その鷹を祭壇に接触させる。鷹は祭壇にとけ込み、天界の風の元素を変容させ、祭壇の東側に隣接する小型の黄色い物見の塔を形成する。

ヴァハエルは、風の鷹を放したまま、再び門の彼方に戻り溶けて消える。

D Pは、北の地の門の中央に移動し、北方を向く。

D P：「わが有する神聖なる地の封印により、われ汝を喚起す、黄金の風の翼よ。」

王笏を振り上げ、H I H Vの封印のシギルを描く。

「H I H V（ヒー・ヨド・ヘイ・ヴァウ）の名において

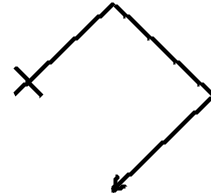
われは汝に命ずる。

S h B V A L（シャヴエル）よ。

地の第1の封印の命により、

磨羯宮を支えよ。」

再度、H I H Vの封印のシギルを描く。



それと同時に風の門の彼方に、風の翼シャヴエルが出現する。

シャヴエルは、骨張った中肉中背の、引き締まった筋肉をもつ男性形の天使である。角張った大きな頭部、肉厚の耳朵、広い額の奥に小さな暗茶色の印象的な瞳が煌めいている。鉤鼻に小さな唇、顎髭をもち、その背後には厚い光翼が、輝いている。

D Pは、風の翼を王笏で指しながら右周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、門の彼方から地の諸力を誘引するよう命ずる。

D P：「シャヴエルよ、地の牡牛を引き具し、祭壇に物見の塔を築くべし。」

地の門の彼方から金褐色の牡牛を引き具したシャヴエルが、一直線に中央の祭壇に歩みより、その牡牛を祭壇に接触させる。牡牛は祭壇にとけ込み、天界の地の元素を変容させ、祭壇の北側に隣接する小型の金褐色の物見の塔を形成する。

シャヴエルは、地の牡牛を放したまま、再び門の彼方に戻り溶けて消える。

D Cが宣言する。

D C：「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。」

四人の司官は、玉座を離れ四つの物見の塔に囲まれた祭壇に近づき、両手を互いに握り祭壇を囲む。

D Cは、祭壇に聖なる書物を置き、司官たちの腕の輪の上に手をかざす。

D V：「I a H a V a H a（ヤアー・ハアー・ヴァー・ハアー）」

D P：「H e V e H e I e（ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ）」

D A：「V o H o I o H o（ヴォー・ホォー・イョー・ホォー）」

D B：「H I H V（ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ）」

D Cが宣言する。

D C：「大いなる周行をもって、祭壇に天界の城を建立せん。」

各司官は、右手の笏で祭壇に触れたまま、左手を神殿の壁に向かって伸ばす。このゆるやかな五線の放射形を構成した司官の外側で、参列者はその外にやはり放射状に並ぶ。そして、この体勢のまま、右周りに回転する。これは右回りの渦そのものである。

祭壇を軸として周行すると同時に、祭壇を囲む四つの物見の塔の中心、祭壇の上部に豪華な屋根飾りのついた城の破風が出現した。D Cの置いた聖なる書物を内蔵する城郭は、内部から光り輝き、四つの物見の塔を飲み込んだ絢爛たる天界の城を形成した。

D A：「神秘なる周行は完成し、天界の城が建立された。

昼と夜は均衡し、春分は到来せり。」

D Vは祭壇に南から、D Aは東から近づく。

D Vは、ホルスのサインを行う。D VとD Aは、祭壇の上に身を乗り出し、他者に聞かれぬようパスワードを交換する。

D V：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

D VとD Aは、身を離し、D Aがハーボクラテスのサインを行う。

今度はD Aがホルスのサインを行い、両者は身を乗り出して、パスワードを交換する。

D A：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

身を離し、D Vがハーボクラテスのサインを行う。

D C：「パスワードは交換された。」

司官を含めた全員が祭壇を取り囲む。

D C：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融合させよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
天界の城に注ぎ込まん。
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに天界の城（変容した祭壇）を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

D C：「聖なる場に神秘なる逆周行を起こさん。」

先ほどとは逆に司官たちは左手の剣を天界の城に触れる。左回りの渦が形成され、そのまま三度周行する。回転が始まると天界の城が変容を始め、四つの物見の塔に分離する。

D Cが発言する。

D C：「神聖なる長老たちよ。神秘なる逆周行は完成した。
四方位に風の翼を喚起し、門を解放せよ。」

D Vは、南の火の門の中央に移動し、南方を向く。

D V：「わが有する神聖なる火の封印により、われ汝を喚起す、銀の風の翼よ。」

剣を振り上げ、I H V Hの封印のシギルを描く。

「I H V H（ヨド・ヒー・ヴァウ・ヘイ）の名において

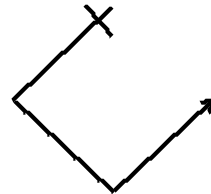
われは汝に命ずる。

H T h Q I H（ハタキアー）よ。

火の第1の封印の命により、

白羊宮を支えよ。」

再度、I H V Hの封印のシギルを描く。



それと同時に火の門の彼方に、風の翼ハタキアーが出現する。

ハタキアーは、小柄でくっきりとした容貌をもち、引き締まった腰と小ぶりの乳房、尖った顎、非常に薄い灰色の瞳、平らな頬骨、薄い唇、小さな歯、少し上向きの鼻、燃えるような赤毛を短く刈り揃え、小さな耳朶をもつ女性形の天使である。その背後には豊かな光翼が、燃える炎のようにゆらめいている。

D Vは、風の翼を剣で指しながら左周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、祭壇の火の諸力を分離するよう命ずる。

D V：「ハタキアーよ、火の獅子を呼び戻し、祭壇の物見の塔を消去すべし。」

火の門の彼方からハタキアーが、一直線に中央の祭壇に歩みより、祭壇の南側に隣接した物見の塔に触れると、物見の塔は真紅の獅子に変容する。天界の火の元素の凝集した獅子を引き具して、ハタキアーは、再び門の彼方に戻り、獅子とともに溶けて消える。

D Bは、西の水の門の中央に移動し、西方を向く。

D B：「わが有する神聖なる水の封印により、われ汝を喚起す、銀の風の翼よ。」

剣を振り上げ、H V H Iの封印のシギルを描く。

「H V H I（ヒー・ヴァウ・ヘイ・ヨド）の名において

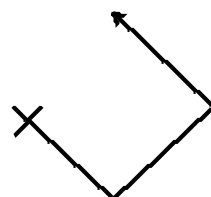
われは汝に命ずる。

I V D I H（ヨディアー）よ。

水の第1の封印の命により、

巨蟹宮を支えよ。」

再度、H V H Iの封印のシギルを描く。



それと同時に水の門の彼方に、風の翼ヨディアーが出現する。

ヨディアーは、豊かな乳房と広い腰、丸い腹をもつ。肌は白く、しっかりとした顎に丸く印象的な額、黒髪に暗い青色の瑞々しい瞳、細い頸に小さな手足とすっきりとした背筋をもつ女性形の天使である。その背後には艶やかな光翼が、輝いている。

D Bは、風の翼を剣で指しながら左周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、祭壇の水の諸力を分離するよう命ずる。

D B：「ヨディアーよ、水の蠟を呼び戻し、祭壇の物見の塔を消去すべし。」

水の門の彼方からヨディアーが、一直線に中央の祭壇に歩みより、祭壇の西側に隣接した物見の塔に触れると、物見の塔は青い蠟に変容する。天界の水の元素の凝集した蠟を持ち上げ、ヨディアーは、再び門の彼方に戻り、蠟とともに溶けて消える。

D Aは、東の風の門の中央に移動し、東方を向く。

D A：「わが有する神聖なる風の封印により、われ汝を喚起す、銀の風の翼よ。」

剣を振り上げ、V H I Hの封印のシギルを描く。

「V H I H（ヴァウ・ヘイ・ヨド・ヒー）の名において

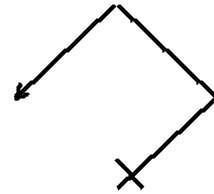
われは汝に命ずる。

H A V I H（ハヴィアー）よ。

風の第1の封印の命により、

天秤宮を支えよ。」

再度、V H I Hの封印のシギルを描く。



それと同時に風の門の彼方に、風の翼ハヴィアーが出現する。

ハヴィアーは、細身で長身の女性形の天使である。長い頸、広い肩、豊かな丸い胸、流れるようなうす茶色の髪、薄い緑の瞳、まっすぐな鼻梁、微笑を浮かべた豊かな情感深い唇、彼女の仕草は開放的で優美である。その背後には薄い光翼が、ゆたかにたなびいている。

D Aは、風の翼を剣で指しながら左周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、祭壇の風の諸力を分離するよう命ずる。

D A：「ハヴィアーよ、風の鷹を呼び戻し、祭壇の物見の塔を消去すべし。」

風の門の彼方からハヴィアーが、一直線に中央の祭壇に歩みより、祭壇の東側に隣接した物見の塔に触れると、物見の塔は黄色い鷹に変容する。天界の風の元素の凝集した鷹を腕にとまらせ、ハヴィアーは、再び門の彼方に戻り、鷹とともに溶けて消える。

D Pは、北の地の門の中央に移動し、北方を向く。

D P：「わが有する神聖なる地の封印により、われ汝を喚起す、銀の風の翼よ。」

剣を振り上げ、H I H Vの封印のシギルを描く。

「H I H V（ヘイ・ヨド・ヒー・ヴァウ）の名において

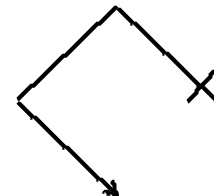
われは汝に命ずる。

V B S h I H（ヴァバシアー）よ。

地の第1の封印の命により、

磨羯宮を支えよ。」

再度、H I H Vの封印のシギルを描く。



それと同時に風の門の彼方に、風の翼ヴァバシアーが出現する。

ヴァバシアーは、普通の上背だが肉付きの良い体格の女性形の天使である。締まった腰と小ぶりの乳房、細い頸に比して大きめの頭部、暗い茶色の瞳、浅黒い肌、短くばさばさの直毛の髪、薄い透明な唇、小さな歯をもつ。その背後には厚い光翼が、輝いている。

D Pは、風の翼を剣で指しながら左周りに回転し内側を向く。喚起した風の翼に、祭壇の地の諸力を分離するよう命ずる。

D P：「ヴァバシアーよ、地の牡牛を引き戻し、祭壇の物見の塔を消去すべし。」

地の門の彼方からヴァバシアーが、一直線に中央の祭壇に歩みより、祭壇の北側に隣接した物見の塔に触れると、物見の塔は金褐色の牡牛に変容する。天界の地の元素の凝集した牡牛を引きながら、ヴァバシアーは、再び門の彼方に戻り、牡牛とともに溶けて消える。

D C：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。

I H S h V H（ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー）

万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。

I H V S h H（ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー）

戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。

光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

D C：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。」

主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
長老は、肉の衣を去れり。」

D B：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。大地の輝きと喜びに、感謝を捧げん。
主の栄光はあまねく地上を満たし、われらに恵みをもたらしたり。
主よ、地母神たる大地と人の子らに、愛と祝福を与えたまえ。
長老は、肉の衣を去れり。」

D A：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。天の音楽の響く大空に、感謝を捧げん。
主の御言葉は、星々の歌声に彩られ、われらに希望をもたらしたり。
主よ、やさしき風と人の子らに、英知と祝福を与えたまえ。
長老は、肉の衣を去れり。」

D P：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。生命の生まれ滅する大海に、感謝を捧げん。
主の御手の指は、すべての被造物に、色鮮やかな輝きをもたらしたり。
主よ、万物の生命の母たる水と人の子らに、多様さと祝福を与えたまえ。
長老は、肉の衣を去れり。」

D V：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。躍動する炎の力に、感謝を捧げん。
主の聖なる火花は、砂のひとつぶたりと見逃さず、靈魂をもたらしたり。
主よ、久遠の霊の表象たる火と人の子らに、力と祝福を与えたまえ。
長老は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

D C：「人の子らよ。聖なる長老たちは、去れり。地上に帰還せん。」

四大の別院に入ってきたときと同様に二手に分かれて出口に向かう。
出口において、祭壇に一礼し、脇間に入る。
地下3階の礼拝所の奥の燃える剣の囀に十字を切り、階段室に入る。

最後に残ったD Cが、祭壇に一例し、《ヴェールを閉じる》サインを行う。

D C：「I H S h V HとI H V S h Hの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

D Cは、別院の北西の扉を封印する。自身は、南西の扉をくぐり、脇間から扉を封印する。
帳が閉じる瞬間に、すべての霊的統制が解かれ、再び四大の息吹が荒々しく渦を巻く別院の
内部が垣間見える。

D Cは、地上へと螺旋階段を登り、神殿の廊室に入る。
D C：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。
静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。
普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MCMXCXI

春分儀式 VE00A

Copyrights © All rights reserved I O S 2000
2000年3月7日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。